

# 教育の森

— Kyoiku no mori —

## 何が明暗を分けたのか

高蔵教育大学（仙台市）は2009年から全国の教職員を対象に、東日本大震災の被災地を巡り震災当時の学校関係者や遺族の話を聞いてもらうプログラム「100のいのちを守る被災地視察研修」を実施している。3回目となる今年は8月11、14日とあり、北海道から沖縄県までの小中高・特別支援学校の教員ら計21人が参加した。研修に同行した。

### 東日本大震災被災地研修ルポ①

#### ●1日目

仙台市からバスで約2時間。一行宮城県気仙沼市波路<sup>ハ</sup>上杉ノ下<sup>ノ</sup>に建つ慰霊碑の前に到着した。この地区で最も高い海拔約120mの高台にあり、犠牲になった98人の名前が刻まれている。

ここで生まれ育ち、語の部をしている小野寺敦子さん（60）が一行を待っていた。幼い頃から地獄があったら即津波（が来ぬ）と教わってきた。高台は津波の被害を受けなかったはず、市の一時避難場所として指定されていた。

地震発生直後、両親を捜していた小野寺さんが車で高台に立ち寄ると、20人ほどがいた。高さ約18mの津波が襲ったのは、小野寺さんが去った直後だった。「ここは大丈夫だ」という過信があった。誰か一人、「もっと高いところに逃げよう」と言えれば良かった。教員らは黙って話を聞いた。

研修の初めが、なぜこんなのか。研修を担当する武田真一・宮蔵教育大特任教授（62）は、明暗が分かれた場所から「です」と説明する。約600m北にある「東日本大震災遺構・伝承館」は気

## 経験者の声に耳傾け

仙沼海洋高校の旧校舎を借りた施設だ。震災時、同校の生徒と教員は2.5m以上離れた海拔約35mの中学校まで避難し、無事だった。明と暗をそれぞれの場合で当事者の話を聞くことは「自分だったな」というのが、考えることになった。武田特任教授は言う。「被災を自分のこととして捉えない限り震災は遠い地域で起きた過去のことになる。当事者の言葉を受け止め、子どもたちに伝える役割を担ってほしい」



内したのは、小学7年で震災を経験した気仙沼星野技術専門学校1年の熊谷樹（19）。「自分よりも若い世代は震災を知らない。自分たちが伝えたいと未来の命が守られたいと考え、伝承活動をするようになった」。

地震発生5分後に校舎を出た生徒と職員計100人、約15分後に約400人が先の寺に着いたが、すぐに、より高いところを自指しう次避難を始めた。「寺にとまっていたら命はなかった」と説明する熊谷さんに、教員らはどうやって次避難するかと判断できたのかと質問した。熊谷さんは、避難の途中で生徒の叫びを取る教員に住民が「ごっちゃんか取ってごっちゃんか」と叫んだことを紹介した。

1日目の夜、教員らは話を抱えていようと見えた。南海トラフ巨大地震が起きた場合、東海から四国の太平洋岸に20、30m級の津波が来ると想定されている。

兵庫県あわじ市立中学の中島健教諭（64）は、想定より大きな津波が来る。当たり前だが当たり前ではないと初めて知った。校舎の屋上と奥山のどちらに避難するのか。誰か判断するのを決めておかないと、と語った。愛知県岡崎市立立中学の桑田卓次教諭

（35）は「生徒に何を伝えたいかならう。先生や生徒が防災意識を持つだけでいいのか。生き残った人の悲しみや生き方をどう伝えたいのか。すこく考えました」と話した。

#### ●2日目午前

岩手県釜石市にあった船住居地区防災センターの跡地に建つ津波伝承施設「いのちをつなぐ未来館」も明暗が分かれた場所だ。

350mほど海に近い船住居と釜石市中央の原屋・生徒が率先して避難して「釜石の奇跡」と呼ばれる一方、同センターに避難した住民もほとんど162人が犠牲になった。

案内役は、当時釜石東中2年の川崎本樹さん（20）。現在は、未来館で語の部をしている。一行は、川崎さんが小学生で手をつないで逃げた道を歩きながら質問を重ねた。どうして逃げるという判断ができたのか。「先生の指示があったのか」。川崎さんは答えた。先生が校庭に車を持ち込み、津波のスピードで走る車と生徒を競争させた。り、けがをした想定の子供をリヤカーに乗せたりして楽しみながら考えさせる防災教育をしてくれた。これがなければ私は助かっていたなかった」

沖縄県国頭村立中学の盛岡善孝教諭は「私の中学も近く小学生を助ける想定だが、本音にできるのか」とつぶやいた。「石丸賢、写真」(次回回は20日掲載します)

岩手県釜石市船住居小と釜石市中央の原屋・生徒が避難した道をたどるなか、震災当時の状況を説明する川崎本樹さん（岩手県釜石市）20日



# 教育の森

— Kyoiku no mori —

## 想定超えた時 判断する力を

全国の教員ら計21人が参加した宮城教育大(仙台市)の3〜11のちを  
守る被災地視察研修「震災直時の学校関係者や遺族の話を聞く研修(8月  
11〜14日の3泊4日の1行は、海沿いを南下し宮城県南三陸町)に入った。

### 東日本大震災被災地研修レポート

●2日目 午後

南三陸町立戸倉小学校は3階建ての校舎屋上まで津波にのまれたが、児童らは約400メートル離れた高台に逃げて助かった。当時校長だった麻生川教・宮城県多賀城市教育長(64)は「屋上に逃げていたら全滅だったが、もし津波が五分で来たら高台への避難中にのまれていた。屋上で高台。どちらに逃げるか究極の選択だった」と語りかた。

麻生川教育長は震災の2年前に同小に赴任した。避難場所を検討する中で「屋上が安全だ」と思ったものの、地元教員らは高台避難を主張した。結論は出さず、緊急時に校長が判断することにした。地震直後、目が合った教員が「高台ですね」と言った。その言葉に背中を押されて高台に向かった。

児童らは助かったが、いったん高台に避難した女性教員が目毛にいた夫を案じて戻り亡くなった。「私は止めろ、とがでまなかった。手を動かして止めればよかった。防災は知識として知っているだけでは何にもならない」。一行は高台のうえで立ち尽くした。

麻生川教育長は「子どもたちが主体的に取り組めるよう

## まずはマニュアルで備え

に、子どもたちに任せる部分が必要だと思つても語った。この日午前を訪れた岩手県釜石市で、語り部の川崎英樹さん(65)が言った「采しめながら考えさせる防災教育」と兵運する内容で、研修参加者のヒントになったようだ。東京都葛飾区立小学校的職員・副校長(57)は「子どもたちが主体的に取り組めるように工夫できると」と話した。

●3日目

午前9時過ぎ、84人が雑居になった宮城県石巻市立大川小学校の校庭。一行は同小6年たった娘を亡くした元中



雨の中、大川小学校の校庭にしゃがんで座り、佐藤敏郎さん(左端)の話を聞く教員ら—宮城県石巻市で8月13日

教員の佐藤敏郎さん(59)に促され、震災当日の児童と同じようにしゃがんだ。地震後、児童らは校庭に約50分間とままり、津波に襲われた。

「どんなことがあっても帰りたい家がある。それが防災です」。佐藤さんは話を振りを上げた。「あの津波を前にして冷静に判断できる人はいない。何かできる人はいない。何かできる人はいない。今、平時に種をまくことです」。

その後約1時間じわじわ、参加者全員が質問した。その中に「防災マニュアルは役に立つかわからないがあった。佐藤さんへ話した。あの日、マニュアルに書いてあること以上の避難行動を取って助かった学校はたくさんあります。じゃあマニュアルはいらないのか。逆です。いざという時は何もできない。その時に逃げるマニュアルを入れる。スイッチを入れやすくするのがマニュアルです。だから本気でマニュアルをつくってください」。

その日の午後、石巻市立門脇小学校の当時の校長、鈴木洋子さん(70)の話も聞いた。同小は津波と火災で全壊したが、児童らは訓練通り真山に避難した。焼け跡が残る校舎の隣で、鈴木さんは「廊下を静かに歩いたり、短時間で集合したり。日常生活をきちんとすることをバニックス状態の子どもを救つ」と話した。

兵庫県南あわじ市教育委員会の白木誠一(主幹)は「密えのしみものが見えた感じがする」と話す。「訓練やマニュアルは大変だが、すべてを

想定内にするのは難しい。日々の授業の中で判断する力を先生も含め身につけなければならぬ」。

●最終日

一行は宮城教育大に戻った。震災直時、宮城県石巻西高校の教頭だった斎藤幸男さん(67)が、多くの避難者を受け入れた経験に基づき「生徒の力を借りない避難所の運営はうまくいかない」と訴えた。その後グループに分かれ研修で得たものを基に何をすべきかを話し合った。研修に同行した同大の小田隆中准教授(48)は「震災の記録は残っているが、実際に現場を訪れて肌で感じ、被災された人から直接話を聞く実感は全く違う。どう生かすかは、それぞれの先生のやり方がある」と話す。

南あわじ市立小学校的の浜口雅代(養護教諭)は児童たちこう話すつもりだ。「みんな家に帰ったら何とどう。『たいま』と言つてやんな。災害が起きて『たいま』が言えなくなったら嫌やんな。それじゃあ何せんあかんと思つて」。命を守るための授業が各地で始まるはずだ。

【石巻整、写真も】

研修の詳細は宮城教育大防災教育研修機構のホームページに掲載しています。問い合わせは同機構(0222-143333)へ。  
(石巻市)の日報に掲載しました